

ヒンデミット:弦楽三重奏曲 第1番

パウル・ヒンデミットは、20世紀前半に活躍したドイツの作曲家。第1次世界大戦後の1920年代からは新即物主義を標榜し、シェーンベルクらの無調音楽とは一線を画す前衛を張った。2曲あるヒンデミットの弦楽三重奏曲のうち第1番は1924年の作。4楽章からなり、第1楽章トッカータでは、3つの楽器がソリストティックに躍動する。第2楽章は静謐な旋律が紡ぎ出される緩徐楽章、第3楽章はピチカートによる短いスケルツォ、第4楽章フーガは、対照的な2つの主題が提示・統合されてプレスティッシモで最高潮に達したのち、楽章冒頭が回想されて終わる。

R.シュトラウス(R.レオポルト編):メタモルフォーゼン(弦楽七重奏版)

1945年に書かれた本作は「23の独奏弦楽器のための習作」という副題を持つが、今回はルドルフ・レオポルトが編曲した弦楽七重奏版でお届けする。「メタモルフォーゼン」とは、ドイツ語の「メタモルフォーゼ(変容)」の複数形で、通常の変奏曲とは異なる書法で作られた楽曲を表している。音楽はベートーヴェンの《英雄》交響曲の第2楽章「葬送行進曲」冒頭の4小節を動機として始まり、急／緩／急の3つの部分から構成される。戦禍によって荒廃していく自国に対する作曲者の悲痛な想いが込められている。

ブルッフ:弦楽八重奏曲

マックス・ブルッフは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活動したドイツの作曲家。本曲は、はじめ弦楽五重奏曲として作曲され、それを改作して1920年3月、亡くなる半年前に完成。長らく楽譜が失われていたが、のちにパート譜が発見され、1988年に出版された(その後ブルッフの自筆譜も発見された)。ヴァイオリン4、ヴィオラ2、チェロ、コントラバスという編成で、(スケルツォ楽章を欠いた)全3楽章からなる。第1ヴァイオリンは非常に技巧的で、ブルッフの理想とする19世紀ドイツ・ロマン派の甘美な旋律にあふれているが、アレグロ楽章に挟まれたアダージョ楽章には、第一次世界大戦後の窮乏や、家族(息子や妻)を喪った悲しみなど、ブルッフの老境があらわれている。